東京　明治十七年七月廿四日　木曜日　第七百十九號　日曜日休刊　定價金三錢

公報

○海軍省達丙第百拾六號　海軍一般
本年(四月)丙第六拾三號達海軍東京軍法會議條例中左ノ通加除改正ス此旨相達候事
明治十七年七月二十三日　海軍卿　川村純義
第三條第六條第拾七條ヲ削リ第四條ヲ第三條ニ第五條ヲ第四條ニ第七條ヲ第五條ニ第八條ヲ第六條ニ第九條ヲ第七條ニ改メ而シテ左ノ壹條ヲ加ヘ以下各條順次繰上ク
第八條　判士長ノ下ニ屬僚貳名ヲ置キ判士長ノ處分ニ係ル文書ノ往復受付官印ノ監守公文書類ノ編修保存諸報告ノ調製及ヒ其他ノ庶務ヲ掌理セシメ又警査四名ヲ置キ警吏或ハ警吏補ヲ以テ之ニ充テ判士長判士或ハ主理ノ命ヲ受ケ令狀ノ執行被告人ノ看守護送公廷ノ警固其他取締等ノ職務ニ從事セシム
第七條第三項中(分課)ヲ(掛)ニ改メ第四項ヲ削除シ次項ノ(五)ヲ(四)ニ改正
第拾貳條中(宣告ノ)ノ三字削除
○海軍省達丙第百拾七號　海軍一般
本年(四月)丙第六拾四號達鎭守府軍法會議條例中左ノ通加除改正ス此旨相達候事
明治十七年七月二十三日　海軍卿　川村純義
第三條第六條第九條第拾八條ヲ削リ第四條ヲ第三條ニ第五條ヲ第四條ニ第七條ヲ第五條ニ第八條ヲ第六條ニ第十條ヲ第七條ニ改メ而シテ左ノ一條ヲ加ヘ以下各條順次繰上ク
第八條　判士長ノ下ニ屬僚若干名ヲ置キ判士長ノ處分ニ係ル文書ノ往復受付官印ノ監守公文書類ノ編修保存諸報告ノ調製及ヒ其他ノ庶務ヲ掌理セシメ又警査若干名ヲ置キ警吏或ハ警吏補ヲ以テ之ニ充テ判士長判士或ハ主理ノ命ヲ受ケ令狀ノ執行被告人ノ看守護送公廷ノ警固其他取締等ノ職務ニ從事セシム
第六條中(分課)ヲ(掛)ニ改正
第拾貳條中(宣告ノ)ノ三字削除
○農商務省達第貳拾三號　府　縣
本年第拾三號布達商標登錄願手續第一條當省ヘ差出スヘキ願書屆書ハ當省工務局商標登錄所ヘ送達候儀ト可相心得此旨相達候事
明治十七年七月二十三日　農商務卿　西鄕從道

敍任

○明治十七年七月一日
任步兵中尉　步兵少尉正八位　岡部勘六
仝　仝　表野九馬一
仝　仝　天岸省一
仝　仝　拔田善得
仝　仝　山田直忠
任砲兵中尉　砲兵少尉正八位　馬淵正文
仝　仝　鶴見數馬
仝　仝　吉田登
任三等軍醫　須田見龍
仝　森岡松太郎
仝　柴岡文太郎
仝　高野孝一
仝　今村俊亮
仝　村井峯之助
仝　千野純雄
○明治十七年七月九日
任砲兵大尉　砲兵中尉從七位　河井令信
任會計一等軍吏　會計二等軍吏從七位勳六等　川口任武
任會計二等軍吏　會計三等軍吏正八位　山村信壽
仝　仝　田口發雄
仝　仝　平井介行
仝　仝　鹿島孝全

時事新報

餘リ長キニ過グルヿナカレ

人ノ心ノ働キハ文明進歩ノ速カナルニ及バズ我日本ノ二十[illegible]テコレヲ今日ノ有樣ニ比較スレハ人ノ心ノ働キモ隨分神速ナルモノヽ如キ感情ヲ喚起スベシト雖ドモ更ニ又顧ミテ世界文明ノ歷史ヲ按スレバ其進步ノ神速ナルヿ實ニ人間ヲ驚カスニ足レリ文明ハ駿馬ノ奔ルガ如ク人心ハ跛鼈ノ行クニ似タリ固ヨリ同日ニシテ論スベキモノナラザルナリ人ニシテ十年以前ノ知識議論ヲ其儘ニ維持シコレヲ今日ニ改ムルヿヲ知ラザル者世間往々ニシテ見ル所ナリト雖ドモ世界ノ文明ハ然ラズ試ニ十年ノ前後ヲ比較シ來レバ殆ンド隔世ノ思ナキヲ得ズ彼ノ文明ヲ輸送スル汽船鐵道電線等ノ有樣ヲ見テモ其一斑ヲ窺ヒ知ルベキナリ文明ノ進步ハ斯ノ如ク神速ナルニ人心ノ働キハ斯ノ如ク遲鈍ニシテ相隨伴スルヿヲ得ザルガ故ニヤ人心時ニ文明ノ進步ニ倦ミテ只管其後ヲ顧ミ強ヒテ一時ノ休息ヲ貪ラントスルノ情ナキニアラズ殊ニ我日本ノ如キハ文明ノ競走場裏ニ入ルニ他人ニ後ルヽヿ五六十年ナリシガ故ニ進テ他ト比肩ノ地位ニ立タントスルニハ其速力ヲ倍加セザルベカラズ尋常ノ競走術ホ且ツ疲倦ニ堪エザラントスルニ況シテ二倍ノ速力ヲ以テ他人ノ跡ヲ追ハントスルヲヤ人心疲勞ノ餘リ時ニ空シク舊時ノ閑天地ヲ夢ミテ戀々ノ情ニ堪エズ其情ノ熾ンナルニ當リテハ世界ノ大勢ヲモ忘却シテ強ヒテ一時ノ閑ヲ偸マントスルノ意向ナキニアラザルガ如キハ蓋シ人間ニ免カルベカラザル病弊ニシテ是非モナキ次第ナルベシ

日本ノ文明ハ駸々トシテ其歩ヲ進メ人心ノ活潑ナル二十年一日ノ如ク嘗テ倦ムヲ知ルヿナシ然ルニ明治十四年ノ末頃ヨリ人心俄カニ疲勞ノ態ヲ現ハシ歩々後ヲ顧ミテ遲疑逡巡シ一旦ハ意ヲ決シテ世界ノ文明洋面ニ乘出シタルモ到底其風波ノ險ニ堪ルヿ能ハズトシテ苦痛ヲ訴ルノ有樣アリ文明ノ競走其業固ヨリ容易ナラズ不幸ニシテ十九世紀ノ文明諸國ト伍ヲ同クシ無辜ノ日本人民ニ向テ強ヒテ此難業ニ堪エヨト云フハ如何ニモ氣ノ毒ノ至リナリト雖ドモ文明ノ進否ハ日本全國ノ興廢存亡ニ關ス一二ノ苦情ノタメニ此歩ヲ止ムベキニアラズ此故ニ社會ノ表面ニハ飽クマデ逡巡却行ノ色ヲ粧フト雖ドモ社會內部ノ實勢ハ依然トシテ其方向ヲ舊時ノ進歩ニ取リ一歩モ後ニ退クヿナシ其狀恰モ江流ニ春潮ノ漲リテ表面ノ氷勢ハ現在上流ニ逆行スレドモ裡面ノ江水ハ依然下流ニ注キテ暫クモ止マルヿナキト一般ナリ故ニ世ノ識者ハ春潮ノ往來ニ驚カズシテ依然其行クベキ道ヲ行キテ顧慮スルヿナシト雖ドモ社會ハ明盲相半スルノ諺ニ洩レズ兎角短見淺識ノ徒ニ乏シカラザルガ故ニ春潮ノ往來忽ヲ此徒ノ安心ヲ攪乱シ狼狽ノ餘リニ天下ノ大勢ハ江河ノ上流ニ逆行スルナリト心得俄カニ其顔ヲ回シテ潮ヲ趁ヒ上流ニ走ルノ風ヲ成スノ恐ナキニアラズ明治十四年來ノ形勢ヲ察スレバ自カラ斯ル事實ノ存スルモノアルヲ見出スベシ一來一往單ニコレヲ一國內ノ事物上ニ就テノミ察スル片ハ其利害必ズシモ大ナラズト雖ドモ世界文明ノ競走場裏ニ立テ他ト輸贏ヲ爭フノ點ヨリ察スル片ハ一進一退其利害ノ關スル所實ニ容易ナラズ一日ノ油斷一週ノ怠慢其罪ヲ贖フニ數年ノ勤勞ヲ以テスルモ尚ホ未タ足ラザル所アリ況シテ全二ケ年間ニ亘ルノ長怠慢大油斷ヲヤ尋常一樣ノ勤勞ニテハ迚モ其罪ヲ贖ヒ返スヿ六ケ敷カルベシ

我輩ハ清佛兩國ノ間ノ東京(トンキン)葛藤始末ヲ聞テハ我日本ノ海陸軍備ヲ思ヒ「パナマ」運河ノ開鑿ヲ聞テハ我日本ノ海港船舶ヲ思ヒ橫濱其他ノ外國人居留地ヲ見テハ條約改正ヲ思ヒ商況不景氣ヲ見テハ鐵道布設ヲ思ヒ德教ヲ思ヒ宗旨ヲ思ヒ外國人全國雜居ノ未來ヲ思ヒ竊カニコレヲ今日ノ實況ニ照合シテ轉タ慨歎ノ情ニ堪エザルモノアリ日本ヲシテ前日鎖國ノ儘ナラシメバ文明行路ノ遲速進退固ヨリ我輩ノ彼是ト異議スル所ニアラズト雖ドモ唯如何セン一旦文明ノ爲メニ開キタル我海門ハ再ビコレヲ鎖スベカラズ既ニ我門ヲ開キテ人ノ入來ルニ任セナガラ依然前日ノ閑天地ヲ存續セントスルガ如キハ蓋シ無理ノ欲望ナルベシ我輩ハ切ニ全國人民ニ悃請ス文明進歩ノ業ノ苦難ナル實ニ君等ガ訴ル所ニ異ナラズ然レドモ明治十四年以來全二ケ年間ノ肩休メハ稍ヤ長キニ過グルノ嫌ナキヲ得ズ今日ヨリ宜シク君等ガ固有ノ勇氣ヲ鼓シ更ニ大ニ奮起シテ世界ノ侮ヲ禦クノ工風ヲ爲スベキナリ

電報

○七月二十一日龍動發　目下商議中なる清佛間れ談判は好結果を生ずべき模樣なり

雜報

○佛國更よ八日間の日延を許す、、、、、、、、、、、、　清佛の談判は去る廿日を以て期限とすれば當日迄よ如何なる結末ゐ及ひたるらと後報を待ゐるに一昨日發兌の橫濱佛字新聞よ佛國れ清國をして佛國の要求よ對し返答を爲すの時間を得せしむる爲めよ更に清國に八日の日延を許したる旨電報ありと見へ又へラルド新聞にも天津より電信を以て此事を報し來りたる由を載せたりされば清廷の廟議も僅々八日の間よは和戰孰とも決し難く更ゐ佛國に向ひ若干日の日延を請ひたるより佛國は更よ八日の猶豫を與へるものと見へたり今を去るとあしかけ二十二年文久三癸亥年英國の軍艦が橫濱に乘込み生麥の事變のため十萬ポンドの償金を舊幕政府よ申掛けたるハ年の二月十九日のとにして應否の返答は二十日限り一日も猶豫はせぬと捻込みたるゆへ即ち三月十日が金圓請取れ日なれども幕府の內議容易ゐ決すべきゐも非ず僅二十日の猶豫と云ひ又十日の延期を許し遂に三月四月を過ぎイヨ〳〵橫濱にて銀圓を渡したるは五月十日よして二月十九日より八十日を經よゐり斯く八十と丁數に當りたる譯けれ最初の申出しゐ二十日と切ゐる其日數を延期猶豫の度每に十、二十と始終十の數を逐ふて最後の八十に達したるとあり左れバ今回佛蘭西が支那政府へ申出したる要求の返答も八日を期して更に八日の延期あれば此後も八の數を逐ふて四八三十二日目か八八六十四日目に落着などれ事になるかも知れざるとなり

○郵船事件並
其全權よて談
よ關し清國政
國公使パテノ
○下關　大臣
よて本年一月
付ての程特別
總御扇子等を
○內閣繁忙
ては未だ休暇
事故正等れ件
○歸京并濵良
務大輔は昨日
上工部大輔け
汽車よて上州
○三重縣令
赴任せ゛樣よ
四日出發する
○出發并歸京
書記官南一郎
て宮城福島衛
用掛小杉雅三
○罷役七官復
するが爲め大
あり居る大
差支なき者を
にて九名、仙
三名、熊本同
合なるよし
○歸任　大坂
しが今度同地
歸任せり
○武官免補
、金澤衛戍司
島廣智氏は免
三大隊長歩兵
二大隊長に補
は去る十七日
○妻木頼黄氏
行き經育州イ
三年生とあり
を卒業せしが
氏を以て初と
同府お赴
○鈴木吉郎氏
昨年越前武任